

まとめ

総合討論

専門家によるコメント

龍谷大学 須川恒：高木さんが特定鳥獣保護管理計画の説明をしてくださいましたが、その中でもあったように、目的をはっきりさせることが大切です。行政やNGOなどが関わっていくわけですが、判断はその場所場所で違ってくると思います。今までなかなかされてこなかったことですが、フィードバックさせながら動かしていくということが、ようやくカワウを通してされるようになりそうだと思います。先日NHKの放送で「多摩川のアユ」を取り上げていましたが(NHK 2003)、堰や水質汚染などが改善されて沢山のアユが戻ってくるようになったそうです。新しい予感がありました。考え方を変えていく必要があります。新しいものがこれから見えてくると思います。

琵琶湖博物館 亀田佳代子：河川を中心にしたお話でしたが、日本各地のコロニーやねぐらのことが良くわかって参考になりました。被害についても、ほかの場所ではどうやっているのかを知り、視点を変えてやるとよいと思いました。伊崎(琵琶湖)で駆除されるカワウの胃内容物を調べると5月と8月はアユが多く入っています。しかし、冬期になると、ブラックバスが増え、ブルーギルは一年を通して食べられています。それだけを見ると、冬は外来種を食べてくれる益鳥であるとも言えます。各地で状況は異なると思いますが、いつ、どの場所で食べているかが重要になります。

葛西臨海水族園 福田：カワウ問題は広域的に取り組まねばならない一方、地域独自で取り組まねばならない部分もあります。最終的に決めるのは地域ですが、できるだけいろいろな立場の人々で話し合っ欲しい。そして、フィードバックをして取り組んで欲しいと思います。



参考資料

NHK総合 2003. 10. 6.放映 地球！ふしぎ大自然「大都会にアユ百万匹 多摩川奇跡の復活」

かつては絶滅が危惧されるほどに減少していたカワウですが、1980年代以降個体数が回復し、現在では各地で人間活動との間に軋轢を生むまでに分布も広がりました。そうした中で、各地で自然保護に携わる皆さまもそれぞれの地域で頭を悩ませてきたのではないかと思います。また、カワウの調査研究を通して樹木被害や漁業被害の現場に携わり、保護管理のあり方について考えていく中で、カワウだけを見てはいけなさと感じています。

カワウの問題は、単なる鳥による被害だけではなく、彼らが生活の場としている水辺環境全体の問題であり、そこに生きる人の生き方の問題でもあると言えます。篠田さんのお話にもあったように、河川という環境は、カワウをはじめ多くの生き物が互いに複雑に関係しながら成り立っています。そこに関わる私達人間も例外ではありません。「河川に生きるカワウと人との共存」それは、私達が河川に生きる生き物達とどう付き合っていくのか、という問題ではないでしょうか。

そのような思いから、特に取り立ててカワウに関心を持たれていない方も含めて、水辺環境や鳥に接してこられた皆さまと、カワウとそれを取り巻く状況について情報を交換し、一緒に考えていくための礎として、このシンポジウムを企画いたしました。

このシンポジウムでは遠方より多くの方々にご参加いただき、また、多くの資料請求をいただきました。心よりお礼申し上げます。開催及び資料の作成にあたっては、財団法人日本科学協会のご支援をいただきました。心よりお礼申し上げます。

今後はさらに皆さまとの情報の交換に努めて行きたいと考えております。現在、2月末の公開を目指して、カワウに関する情報を集めたWebサイトの作成を進めております。カワウのサイトは、(財)日本野鳥の会のホームページ上の自然保護事業に分類されている“野鳥と人との共存”のページに置かれる予定です。皆さまのアクセスをお待ちしております。

財団法人日本野鳥の会のホームページ URL

<http://www.wbsj.org/index2.html>

平成15年度「水域環境をめぐる学習活動等の成果公表支援」事業
シンポジウム「河川に生きるカワウと人との共存の道を探る」
実施報告資料集

2003年12月5日

〒191-0041 日野市南平 2-35-2
財団法人日本野鳥の会 自然保護室 カワウ担当
TEL: 042-593-6872 FAX: 042-593-6873
E-mail: kawau@wing-wbsj.or.jp

このシンポジウムは財団法人日本科学協会の支援（日本財団助成事業）により実施したものです